

注解『七十一番職人歌合』稿（二十六）

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第五十五番および第五十六番の注解を収めた。

五十五番 臺目割 行藤造

〔職人尽〕

〔誹諧職人尽〕ひきめくり くり鉤ひき目も分かねさつき雨（二世 沾涼） 秋風や目にはさやかにひきめくり（豊水）  
弓張の心ひきめやまめ男（寥和） / むかばき作り むかばきやかかる山路の菊の露（兀峰） 当世にむかばき作れ射  
場始め（如此） 蘭の花や襪作る離れ里（沾涼） むかばきや妻も見まがふ夜興引（路道） むかばきや裾野の晴れに射  
の花（一尺） むかばきの毛色を鹿の尻目哉（寥和）

【本文】

五十五番

くりかんな〔類〕くり鉋

そのまゝにすむ引目やの月

秋ふかきほしはくもれとむかはきの

白毛のつきのさやかなるかな

左右ともに、よろしからず。可為持。

わか恋はかさかけひきめぬりこめて

いとめも見えずなくなみた哉

折てもあふせやあると町人の

むかはきかはのなてもものもかな

左右、猶無風情。為持。

ひきめくり

一尺にあまる

御ひきめは、くり

にくゝて、道か

ゆかぬ。

むかはきつくり

あはれ、御むかはきや。



くりかんな〔類〕くり鉋

そのまゝ、〔類〕其まゝ、引目や〔類〕ひきめや

秋ふかきほし〔類〕秋深き星

つき〔類〕月 さやかなるかな〔類〕さやか成哉

わか恋〔類〕我恋 ぬりこめて〔類〕塗こめて

見えず〔類〕みえず なみた哉〔類〕涙かな

あふせ〔類〕逢瀬

ひきめくり〔白〕〔類〕墓目くり〔忠〕五十五番 墓目くり

御ひきめ〔白〕〔忠〕御ひき目

むかはきつくり〔白〕〔忠〕〔類〕むかはき造

けいろも

よし。

けいろ—「白」〔忠〕毛いろ

〔語注〕

◎ 藁目は、大鐔おほかばらの一種。朴・桐などの軽い材質を用い、紡錘形の中を削り抜いて、数個の穴（「目」という）を開ける。これを付けた藁目矢を射ると、中に風が入って大きな響きを生じる。笠懸（後述）や犬追物に用いる。

行藤は、騎馬での遠行や狩猟の際に腰から下に着けるはきもの。鹿の皮などで作った。

◎ くりかんな 「刳鉋」で、『日葡辞書』補遺に、「Curigana 何かに孔をくりぬくために、たとえば、笛などのように、内側を円く中空にするために使う刃物の一種」とある工具であろう。（同本篇には、「Curigana 大工が滑らかに削るのに使う刃物の一種」とあり、これは、『和漢船用集』に見える「反台 合類節用、曲鉋、くりかんなと読せり。反台と云は、短台に反りを付たる者、くりかんななり」とある「曲鉋」のことか。）「鑄鑄」という、刃が雑刀の刃のように反った刃物と同じ、または同種のものと思われる。『ヴィジュアル史料 日本職人史』<sup>[1]</sup>によれば、絵に見える、先の曲がった工具がそれである（「藁目刳」の項）という。

◎ かたいらしたる 『角川古語大辞典』の「かたいら〔片入〕」の項に、「技術の方面で、その一部分を修得したにとどまること。例えば、馬や鷹などが、まだ十分に調教されていない状態にあること。また、人が道具などをよく使いこなしていないこと」として、この用例を上げ、また、『時代別国語大辞典 室町時代編』の「かたいら〔片入〕」の項に、「片方に片寄って入ること」として、この用例を上げるが、いずれもしつくり来ない。あるいは、「かたいら」は「かたゑり〔片彫〕」の転で、片寄ってくり抜く意か。ただし、「かたゑり〔片彫〕」の用例は管見に入らない。

◎ やふれめ 「破れ目」の「目」に、藁目の「目」を掛けるか。

◎ そのまゝにすむ引目やの月 「そのままに済む」は、藁目にはもともと目があるのだから、破れ目が出来ても差し支えない、の意か。「済む」に「澄む」を掛ける。藁目矢がそのままに済むように澄む月。

◎秋ふかきほしはくもれと 天体の「星」に、鹿の上毛の斑点の意の「星」を掛ける。後者の意の「星」は、「五月雨のひまなきころもさをしかのうはげのほしはくもらざりけりへ家良」（新撰六帖、二）、「さをしかのわがまつつまや秋二毛あひ見まほし（助動詞「まほし」と掛ける）の稀になり行く」（草根集）など、まま歌に詠まれた。『貞丈雜記』十四、皮類之部によれば、鹿の上毛は、旧曆五月ころから全体が黄色くなり、白い斑点が出て、だんだん鮮やかになるが、秋から冬にかけては全体が黒くなり、斑点も消えていく、という。右の引用歌にも、その事実が反映されている。これも、秋が深まって斑点が目立たなくなること、を、「星は曇れど」と表現している。なお、同雜記によれば、行藤にはそれぞれの季節の毛皮を用いたが、若年者ほど明るい色のもの、老年者ほど暗い色のものを用いたという。

◎むかはぎの白毛のつき 「行藤の白毛」は、前項に述べた鹿の上毛の斑点のことであろう。その白毛のような白い月、と続けるかと思われるが、先に、この斑点を「星」と表現しているから、分かりにくい表現になっている。「行藤」は、「夏野踏む勢子が行藤楯朽ちて干す暇もなくさみだるる比へ源仲正」のような例がないではないが、あまり歌に詠まれない言葉。「白毛の月」も異様な造語。

◎わか恋は…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一（五番語注「わが恋は」の項参照）。

◎かさかけひきめぬりこめて 「笠懸暮目」は笠懸（馬を走らせながら馬上から遠方の的を射る射芸。もと射手の笠をかけて的としたことによる名）に用いる暮目。暮目の筒の下部に控目ひしめと呼ぶ縦の割れ目十二列を入れるのを特徴とする。「塗り込む」は、暮目を漆で塗り固めること。『貞丈雜記』十、弓矢之部に、「暮目を赤うるしにぬると云ふは、朱うるしの事にてはなし。うるしに絵の具をませず、うるし斗りにてぬれば、おのづから赤黒くなるをいふ也。今ためぬりなど、いふ色のごとし」とある。ここは、必要以上に塗ってしまった、というのであろう。

◎いとめも見えず 「いとめ」は「糸目」で、笠懸暮目の控目のことか。漆を塗りすぎたために、控目も見えなくなつた、というのであろう。その意に、まったく目も見えない意の「いと目も見えず」を掛ける。

◎折てもあふせやあると町人の 「町人」は、「まちびと」あるいは「まちうど」と読んで、「待人」の宛字か。「待人」は、元龜二年京大本『運歩色葉集』に、「待人マナツルヒ」とあり、易占の用語であつたらしいことが知られるが、勿論、雅語

ではない。和歌では、「宿近く梅の花植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけりへよみ人しらず」(古今集、一、春歌上)のように、「待つ人」の語がしばしば用いられるが、ここは、下の「撫物」の縁で、あえて不自然な言葉を使ったのであろう。折ったところで逢う機会などあろうかと思いつつも、なお来てくれるのを待つ相手の、意か。

◎むかはきはのなてももかな 「むかはきは」は、「行膝皮」で、要するに行膝そのものをいうのであろう。「撫物」は、襖などのとき用いる、身代わりの人形や小袖などの衣類。これで体を撫でて穢れを移し、川に流すなどした。「行膝皮の撫物」は、小袖ならぬ行膝の撫物、という滑稽を狙った表現か。あるいは、「行膝皮」に架空の川名「むかばき川」を掛け、その「むかばき川」に流す撫物、の意か。(その場合は、上句の「逢ふ瀬」は「川」の縁語。)いずれにしても、相手に逢えないまでも、せめてその身代わりである撫物が欲しい、というのである。「源氏物語」東屋の、薫の歌、「見し人の形代ならば身に添へて恋しき瀬々の撫物にせむ」を念頭におく表現か。

◎無風情 「風情」は、歌の趣向ないし着想。

◎一尺にあまる御ひぎめ 『騎射秘抄』に、犬追物に用いる褄目について、「引目大小の事、是又昔今事に懸隔也。彼是愚意においては、いづれも不可然。其故は、昔様とて四五寸の引目、余に見所なく覚ゆ。又、当世様とて、よは弓にさのみの大引目も見にく、おほゆ。……余の大小、共に不可然。但、人により弓によるべし。無相違は、一尺二尺にもすべし」とあり、時代が下るにしたがって大型化し、時に一尺、二尺の大褄目も用いられるようになったことが覗われる。「御ひぎめ」と「御」を冠するのは、この褄目が貴顕からの注文体であることを示唆する。

◎道かゆかぬ 「道が行く」は、物事がはかどること。仕事の能率が悪い、というのである。

◎あはれ、御むかはきや ああ、いい行膝だ、と自分の作った行膝に満足する言葉。「御むかはき」と「御」を冠するのは、この行膝が貴顕からの注文体であることを示唆する。

◎けいろ 毛色。

〔絵〕

暮目劔は、烏帽子を着、諸肌脱ぎで袴を履き、左手に暮目を持ち、右手の工具で劔り抜くところ。前に、暮目三個、工具二種、削り滓。前の工具のうち先の曲がった方は劔鉋か。白石本は、削り滓を描かない。  
行藤造は、烏帽子を着、諸肌脱ぎで袴を履き、鹿皮の行藤一對の片方を撫でている様子。前に、もう片方の行藤。

五十六番 金掘 汞掘

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙図彙〕 銀<sup>かねほり</sup>、金<sup>きん</sup>、銀<sup>ぎん</sup>、銅<sup>あかがね</sup>等、石中より出づる。此の穴を真吹と号す。堀手を下在といふ。穴のうちにては、さ

ざいの殻にて火をとほす。金山<sup>かなやま</sup>所々多し。金<sup>かね</sup>ははじめて奥州より出づるなり。黒金<sup>くろがね</sup>は備中より出だすとかや。〔誹諧職

人尽〕金掘 水かね掘 山吹は山にも捨てぬこがねかなへ憲文 草の露ゆりよせて見よ只の水へ作者不詳 金ほりや

なを行き行きて千鳥聞くへ玉栄 金掘が捨てたる山の松に月へ馬光 金ほりの聞き<sup>きこ</sup>を出でてほととぎすへ金舛 かねほりの眼は休まれず菊の宿へ疎蓬 時を得て蔓にも咲くや金銀花へ文笑 かねほりや綱に取りつく銀真桑へ其木

金掘も穴を出でたる彼岸哉へ上州桐生 青里 金掘やあたたかに寝る雪の暮れへ全朝 金ほりや煙草きらして秋の

暮れへ大輔 かねほりや山口<sup>しよ</sup>澤<sup>さわ</sup>き春待ちぬへ葉五 さみだれやなほ日に疎きこがね掘りへ卯雲 金ほりもわが一日

やとしの市へ歩東 ひいやりと蔓にあたるや秋の音へ大室 頼もしやかかね掘る山の高笑ひへ寥和 水かねは斯くは

掘られじ蓮の雨へ里百 葛の花水かねほりの筈なれやへ寥和 追加 水かねの戸樋をこぼれてこぼる哉へ茂林 〔職

人尽狂歌合〕左 金ほり 千金にしかへて聞かんと金ほりの耳の垢ほるはつ時鳥 左、物めでする心ならば、千々のこが

ねにもかへつべし。右、……勝とぞ申べき。／左 金ほり こがねてふ外にも耳の穴ほりて聞きぬる佐渡の山郭公

左、金ほる人の耳の穴ほるといへる歌、たぐひ多ければ、いづれをよしとも定めがたくや。右、……勝とはきはめて侍り。  
／ 右 金ほり 金をほる岩に響けば一声を二つに割りて聞く郭公 右、詞花集に見へたる、一声鳴けば一声ぞ聞く、といへるにも通ひて、さる山のわたりは、山彦もうるさままでこそこたふべけれ。二つに割りてなどおかしくこそ。勝負わいためがたく侍れば、持と定めて侍り。

【本文】

五十六番

なかむとてこかねもほらぬつつさひの

さひてそ見ゆる秋の夜の月

みつかねの草にをくかとみゆるかな

つゆにやとれる月のひかりを

左哥、月みるとて金ほらねは、つんさひの

さひたるらむ、ことはり叶て聞ゆ。つさひとは

金ほる具足にや。右も、にせ物によみかなへ

たれと、しゐて申さは、左かつへくや。

一さほにあまるこかねのをもはかり

いく目ともなく人そ見らるゝ

あちきなやにふのみ山にほるかねの

みつから人におもひいりぬる

左歌、たくみ也。右、水とかねとを二にいひ

きりて、題の心おもひ入たるに、たり。

こかね―〔類〕金 つつさひ―〔忠〕〔明〕つんさひ〔類〕つんさひ

見ゆる―〔類〕みゆる 秋の夜―〔類〕秋夜

をく―〔類〕置 かな―〔類〕哉

つゆ―〔類〕露 ひかり―〔類〕光

つんさひの―〔白〕つんさひ□の

らむ―〔明〕〔類〕らん つさひ―〔忠〕〔明〕〔類〕つんさひ

しゐて―〔類〕強て 左かつへくや―〔類〕左可勝や

一さほ―〔類〕一棹 をもはかり―〔類〕おもはかり

いく目―〔類〕幾目 見らるゝ―〔類〕みらるゝ

おもひいりぬる―〔類〕思ひいりぬる

心―〔類〕こゝろ

仍為持。

金ほり



金ほり―〔忠〕五十六番金ほり

水かねほり

水かねほり―〔白〕〔忠〕みづかねほり 汞掘〔類〕汞ほり

〔語注〕

◎金掘は、砂金を採掘する職人。中世末期までは、砂金洗取による産金法が支配的であった(国史大辞典「金」の項)。

汞掘は、汞(水銀のこと)を採掘する職人。

◎なかむとてこかねもほらぬ 美しい月に見とれて、本来の仕事をしないのである。同想の歌は、二番左、壁塗の月の歌「故里の壁の崩れの月影はぬる夜なくてぞ見るべかりける」、三番右、塗士の月の歌「眺むとてぬる夜もなきにあら 漆刷毛目も合はぬ村雲の月」。

◎つつさひの 「つつさひ」は、忠寄本・明暦板本は「つんさひ」。類従本は「つん<sup>イ</sup>さひ」とするが、「つつ<sup>ツイ</sup>さひ」の誤写か。なお、判詞には「つんさひ」、「つさひ」とある。これらのことから、「ツツ」<sup>ツ</sup>という促音形(「つつさひ」は促音の無表記であろう)と「ツン」<sup>ン</sup>という撥音形が併存していたのであろうと思われる。「さひ」の「ひ」は、清濁未考。「つつさひ」と同類かと思われる語が、古く正倉院文書に、「都岐佐備」(造石山寺所鉄用帳・天平宝字六・一・三



○〈大日本古文書五〉、「都久佐備」(造石山寺所鉄用并作帳・天平宝字六・一・三〇)〈大日本古文書一五〉と、濁音表記で見えるが、同文書にはまた、「築佐比」(山所作物雜工散役帳・天平宝字六・三・三〇)〈大日本古文書五〉と、清音表記の例も見え、いずれとも決定しがたい。(ただし、「備」は乙類、「比」は甲類の仮名であるので、この両者は別語かもしれない。)「つつさひ」の実態についても、未考。判詞にも、「つさひとは金掘る具足にや」とあり、判者にも詳細は不明であった。ただ、前に「金も掘らぬ」とあり、後に「錆び」と続くことから、砂金を掘るのに用いる金属製の道具であることは間違ひなからう。『貞丈雜記』十三、馬之部には、「旧記に、馬の印を記したる条に、つくさい、金鑿、かねほり道具也、絵やう不見知也、とあり。馬具之法、皆其並雜、同書等の書に見たり。つくさいは、つんさいともいふ也」として、本職人歌合を引き、絵の金掘の膝元にある手斧形の道具を、「是つんさいといふ物也」とする。上句全体で、序詞的に下句に続く。

◎さひてそ見ゆる秋の夜の月 つつさひが、使われないので「錆びて」の意に、「寂びて」を掛ける。「寂ぶ」は、勢いが衰えて寂しげな趣になること。月が「寂ぶ」と表現する歌は多くはないが、「長月もいく有明になりぬらん浅茅の月のいとど寂び行くへ慈円」(新古今集、五、秋歌下)(ただし、『拾玉集』などは、第四句「浅茅の霜の」)、「住吉の岸の松風音さえて寂びたる夜半の月のかげかな(季広)」(万代和歌集、四、秋歌上)などのように、深夜ないし明け方の月についてという例が見える。こゝも、明け方の月をいうのであろう。「錆ぶ」という俗語を掛けるのは、本職人歌合第三番右研の月の歌と同想であるが、歌としては勿論異例。つつさひが錆びているように、寂びて見える秋の夜の月。

◎みつかねの草にをくかとみゆるかなつゆにやとれる月のひかりを 草葉の露が月影を宿して光っているのが、水銀のように見える、というのである。露に宿る月影を詠んだ歌は、「浅茅原葉末に結ぶ露ごとに光を分けて宿る月影へ親盛」(千載集、四、秋歌上)など、枚挙に遑がないが、ただし、それを水銀に見立てるのは、「曇りなく池の鏡を磨かなんただ水銀ぞ蓮葉の露」(草根集)の例がないではないが、異例。

◎つんさひの 白石本は「つんさ□の」と判読不能。

◎つさひ 忠寄本・明暦板本・類従本は「つんさひ」。

◎ことはり叶て聞ゆ 「理叶ふ」は、理屈が通っていること。「金鳳の西にかへるによせて、あかぬなごりぞおほえ山あきはいくのかたをながめて、といへるは、ことわりかなひてやきこえ侍らん」（千五百番歌合、八百十五番判詞）など、歌合判詞にしばしば用いられる言葉。

◎にせ物によみかなへたれと 「似せ物」は、ある物を他の物に見立てて表現すること。また、その表現（三十三番語注「にせ物さる事なれと」の項参照）。ここは、露を水銀に見立てた表現。「詠み叶ふ」は、歌を思いどおりに詠みおおせる意であろう。歌合判詞に、「俊恵法師と申せしもの、あしのやのなだ、とおきて、たけたかくいみじかるべきに、すゑの句のかなふほどなるがかたきなり。それによみかなへたらんはめでたかるべし、とつねに申し侍りし」（千五百番歌合、千五百十六番判詞）の例がある。

◎一さほにあまるこかねのをもはかり 「一竿」は、一つの竿秤で計れる最大の重さを用いのであろう。「金の重（し）」から「思量」と続け、「秤」を掛ける。（あるいは、「重秤」などと呼ばれる秤があつたのかもしれないが、この点、未考。）「おもばかり」は「おもんばかり」の転。ここは、恋の思いの意で用いていると思われるが、そのように特殊化した用法は例を見ない。また、「おも（ん）ばかり」は漢文訓読系の言葉で、通常、歌に用いる言葉ではない。ここは、「金」の縁であえて不自然な言葉を用いたのである。一竿で計りきれないほどの金の重さのような私の思い。

◎いく目ともなく人そ見らるゝ 「目」は、重さの単位「匁」の略。その意に、見ることの回数を示す「目」を掛ける。金の重さがいく目とも知れないように、いく目ともなく相手を見てしまう、というのである。「目」はまた、目盛りを意味し、「秤」の縁語。

◎にふのみ山 丹生のみ山。伊勢国飯高郡丹生（現三重県多気郡勢和村丹生）の山地。古来水銀を産出した。

◎かねのみつ 「みづから」と続けるために、「みづかね」を言い換えた造語であろう。

◎みづから人におもひいりぬる 「丹生のみ山に掘るかねの水」から、序詞的に「みづから」と続ける。「水」に「みづから」を掛けること自体は、「ねぬ繩の寝ぬ名はかけてつらさのみますだの池のみづからぞうきへ為氏」（続拾遺集、十二、恋歌二）など、例は少なくない。「思ひ入る」（自動詞・四段）は、ここは、深く恋い慕うこと。この意味の「思

ひ入る」は、「恋ひわびて思ひ入佐の山のはに出づる月日のつもりぬるかな（公長）（金葉集、七、恋部上）、「わが恋は吉野の山の奥なれや思ひ入れどもあふ人もなし（頭季）」（詞花集、七、恋上）のように、出家を決意するなどして山に入る意を掛けることが多い。こども、あるいは、「丹生のみ山」に入る意を響かせるか。いずれにしても、自分の方から惚れ込んだのだと思えば、恋のつらさもいたしかたのないことだ、というのである。

◎水とかねとを二にいひきりて 「言ひ切る」は、一つの言葉を切り離して言う意か。「みづかね」を、「みづ」と「かね」とに分けて詠み込んだことをいうのであろう。ただし、「言ひ切る」のそのような用例は管見に入らない。

◎題 ここでは、歌に詠み込んだ「みづかね」のことを指すか。

◎おもひ入たる 「思ひ入れたる」と読むのであろう。「思ひ入る」（他動詞・下二段）は、素材を愛着をもって詠み込むこと。「くれなるの浪、もみぢのふちは、まことにふかくおもひいれて、心の色もそめましてこそ侍らめ」（千五百番歌合、七百五十五番判詞）など、歌合判詞にしばしば用いられる言葉。かつ、ここは、歌に「思ひ入りぬる」とあるのを茶化したのである。

### 〔絵〕

金掘は、頭巾を被り、袖・裾の短い筒袖を着、脚絆を履く。前に、板状の物二枚。横に、曲物と、砂金を掘る道具らしい物二種。道具類について、『ヴィジュアル史料 日本職人史<sup>[1]</sup>』は、採鉱道具としての鑿と鑿、淘汰道具としてのカネエという板と篩と解する（「金掘<sup>[1]</sup>」の項）。

汞掘は、頭巾を被り、袖・裾の短い筒袖を着、手甲・脚絆を着ける。両脇に鍬と竹筒様の物。後者は、『ヴィジュアル史料 日本職人史<sup>[1]</sup>』によれば、採取した水銀を入れる竹筒という（「汞掘<sup>[1]</sup>」の項）。尊経閣本・忠寄本・明暦板本は、筒袖に三鱗模様。

### 〔参考〕

○（大島の第二の地方区の）第九の国は伊豆 *Idzu* で、豆州 *Toxá* ともいい、三つの地区に分けられている。……この国には、われわれも見だが、金銀の鉱山が数多くある。　（日本教会史、一卷、六章）

○（大島の第三の地方区の）第七の国は陸奥 *Mitú* で、奥州 *Voxu* ともいい、日本中で最大の国であって、五十四の地区に分けられる。……この国には金や銀の鉱山がたくさんある。　（同）

○日本の国土には多くの鉱山があつて、あらゆる種類の金属を産出する。例えば多量の鉄、銅、また少量ではあるが、これらと銀や鉛や錫や水銀との混合物を産する。……また山の一部には金山があつて、金は銀と一緒になっているのが銀と共に採取し、それを水銀で分離する。一部は金山の地域でとれ、一部は川沿いの低地にある泥中のごく狭い地域で最良のものがとれる。最も多量の金は関東 *Quandó* なり、奥州 *Voxu* の国なりにある。　（同、七章）